ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILERA NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES





■一般社団法人 日本ブラジル中央協会

対ブラジル、安倍首相の本気度一山田・前中南米局長講演から・・・・・ 4

グローバル・パートナーシップ幕開け……… 5

リオ連邦大学の国際学会…………6

統一選挙に関して ………7

多文化共生と日系ブラジル人一浜松市長の経験から…… 8

ブラジル市場新規参入の留意点…………… 10

ホリバ・ブラジル社…………… 11

ブラジルサッカー再建なるか …………… 13

(ウーマン·アイ) ブラジルの「ババさん | ······ 14

〈ジャーナリストの旅路〉思い出される29年前の民政移管 …… 14

イベント/新刊書紹介/協会からのお知らせ …… 15

(外務省中南米局提供情報並びに現地メディア報道他より)

特集『日伯密着 新地平を拓く』

特集『日伯密着 新地平を拓く』

2014年は伯日戦略的

アンドレ・コヘーア・ド・ラーゴ

堀坂浩太郎

北脇保之

特集『日伯密着 新地平を拓く』

連載・最近のブラジル政治経済事情

特集『日伯密着 新地平を拓く』

連載・日系企業シリーズ [第32回]

ノルデスチ文化再興運動を主導した

連載・ビジネス法務の肝

渡邉泰秀/笠原康弘

連載・文化評論

連載・エッセー

明石和康

非日系へ裾野広がる日本研究

サルヴァドール



年にわたって続いた奴隷制度による黒人たちの ブラジルへの到着港でもあった。そのためアフロ 文化色の強い街として知られている。アフリカ の各地で信仰された様々な神様が、サルヴァドー ルでひとつの宗教として形成され、カンドンブレ という宗教ができた。儀式で演奏されるパーカッ ションのリズムは、一見単調だが、実は奥深く、 現代のブラジル音楽に多大な影響を与えている。

街角で女性が、お豆をすりつぶして揚げたアカ ラジェというスナック菓子を売っている風景を 目にする。これは、もともとはカンドンブレの数々 の神様のうちのイァンサンと呼ばれる神様に捧 げる神聖なるお供え物でもある。サルヴァドール で行われる大きなお祭りに、ボンフィン祭りとイ エマンジャ祭りがあるが、これもカンドンブレの 神様をまつるためのお祭りで、カンドンブレ自体 が、この街の一つの文化遺産としてみなされてい る。庶民地区には、カンドンブレ祈祷所がいくつ も存在する。私の知人にもカンドンブレの信者が いるので、儀式の見学に行く事もある。パーカッ ションが演奏され始めると、祭司や助祭たちが輪

そのうち神様がそれぞれの女性達の体内にや どり、彼女達はトランス状態に陥る。友人でお酒 もタバコも大嫌いな女性がいるが、彼女にカボク 口という神様がやどると、ビール瓶をかかげてゴ クゴク飲みほし、葉巻をプカプカと吸い出す。科

学や理論では説明できない出来事 が目の前で起こると、信仰儀式と いうより、スピリチュアル的なも のを感じさせてくれる。ブラジル の中でも特殊な文化要素のある街 サルヴァドールは、実に奥が深い





になって時計とは反対周りで延々と踊り始める。

ミステリアスな街なのである。



(写真家、サルヴァドール在住23年)





ブラジルとめざす、明日がある。

事業投資を軸に総合力を活かし、 新しい価値を。



鉄鉱石の生産・販売で世界最大のシェアを誇る ブラジルのヴァーレ社に、2003年から経営参画。 食糧の安定的な 供給のために。



東京都23区の2倍に相当する土地で農業を展開。



挑戦と創造







写真家田中克佳の 「表紙のひとこと」

リオデジャネイロのイパネマ 海岸の風景。黄金色の夕日を 浴びて、人々は無心にサッ カーボールを追いかけていま した。(65年横浜市生まれ、 早稲田大卒、博報堂に入社、 93年に退社後渡米。米ナショ ナルジオグラフィック誌の写 真アシスタントを経て独立。 ニューヨーク在住。www. katsutanaka com'

特集

日伯密着 新地平を拓く



安倍首相の8月のブラジル訪問は日伯関係の「新しい地平」を拓く歴史的意味がある。ブラジルの 日系人社会は10年ぶりの首相訪問を快く迎えたが、次の10年の日伯関係は移民をベースとする「親密」 から、あらゆる分野の「密着」へとステージを一段上げたい。両国はそういう時期に来ている。

対ブラジル、安倍首相の本気度

山田・前中南米局長講演から

首相の中南米歴訪に全行程同行した山田彰前中南米局 長は9月半ばの日本ブラジル中央協会主催の講演会で、 8月1~2日のブラジル訪問の詳細な報告と成果を明ら かにした。その中で、新聞やテレビ報道では伝えられて いない「秘話」や「裏話」が飛び出した。いくつか中身 を紹介したい。

◆その 1:盛り上がったサッカー感謝の集い。

首相が依頼したブラジリアの集いにジーコ、ドゥンガらが参加し、現地では大きく報道された。午前中の会合だったが、前日の夜から大騒ぎだ。朝食時に記者団が次々写真撮影を頼むので、さすがのジーコもいいかげんにしてよ、という感じだった。

◆その 2: サービス精神あふれた首相。

実は準備段階から「日系人との会合をしっかりセットして」と首相から言われていた。サンパウロでは日系人各団体等との懇談に続き、日系団体主催首相歓迎会があった。歓迎会には1100人が集まり、首相は参加者全員との写真撮影に応じた。「首相訪問としては前代未聞」と山田氏。写真は東京でプリントし、現地に送られた。山田氏は「首相のサービス精神に驚いた」という。

◆その3:医療分野規制の効率化と協力を強調。

首相は第一次内閣を体調不良で放棄したことから、病気を救ってくれた特効薬に特別の思いがある。しかし薬品承認には時間がかかった。「医療規制に私ほど強い関心を持つ首相はいないと医療分野の協力を力説したという。

◆その4:政治家の訪伯ひんぱんに。

1959年の祖父・岸元首相の訪伯、85年の父・安倍晋太郎外相(当時)の訪伯という歴史がありながら、政治リーダーの訪伯が少ない。首相は政治家の「よりひんぱんな訪問」の必要性を訴え、自らも再訪の気持ちを伝えた。

◆その5:間に合わなかった共同声明。

「8月1日の首脳会談後に共同声明を出す予定が調整に 手間取り、徹夜になった。それでもまとまらず、結局2 日にずれ込んでしまった」と山田氏は苦労話を披露した。 講演する山田前中南米局長(左)と高瀬新局長



◆その6:事故車両に乗っていた山田氏。

高速道路で交通事故が起きた。首相の車は問題なかったが、自分を含めて20人が被害を受けた。軽傷だったが、自分で記者ブリーフをしたので新聞記事に名前が載り、東京の留守宅に電話がかかってきた。

Q&A:山田氏は「新大統領は来年は来てくれるでしょう」と明言した。安倍首相は今度の訪伯を機に「16年のリオ五輪に行くと思う」と期待感を示した。

高瀬寧・新中南米局長の話(講演会出席)

「安倍総理訪伯のフォローアップをしっかりやりたい。 併せて2国間関係の増進に努めたい。」

首相のブラジル訪問中に 署名・交換・発表された文書一覧 (外務省発表)

日伯戦略的グローバルパートナーシップ構築に関する共同声明

海洋資源開発促進のための造船協力に関する 日本国とブラジル連邦共和国との間の共同声明

日本国厚生労働省とブラジル保健省との間の 医療・保健分野における協力に関する覚書

ブラジル科学技術イノベーション省と海洋研究開発機構

(JAMSTEC) との間の海洋研究・開発の協力推進に関する意図表明文書

日本国文部科学省と日本国国土交通省並びに ブラジル科学技術イノベーション省との間の防災に関連する 環境及び持続可能性の問題に関する基本同意書

国際協力銀行 (JBIC) とブラジル国立経済社会開発銀行 (BNDES) との間の 日本の中堅・中小企業のブラジル投資促進に関する協力を目的とした覚書

日本貿易保険 (NEXI) 及びみずほ銀行とペトロブラスとの間の

FPSO 建造代金に関する融資契約及び保険引受合意文書

日本貿易保険 (NEXI) 及び三井住友銀行とアマッジ社との間の 農業開発資金に関する融資契約及び保険引受合意文書

> 石油天然ガス・金属鉱物資源機構(JOGMEC)と ヴァーレ社との間の鉱業分野に関する覚書

鉱物資源分野における業務協力のための 国際協力銀行(JBIC)とヴァーレ社との覚書

ペルナンブコ連邦大学、アトランティコスル造船、IHI 間での覚書

科学技術振興機構(JST)と サンパウロ州研究振興財団(FAPESP)との間の協力に関する覚書

国立大学法人筑波大学とブラジル日本文化福祉協会との 連携・協力に関する覚書 特集 日伯密着 新地平を拓く 🍑

2014年は伯日戦略的 グローバル・パートナーシップ幕開け

2014年はブラジルの歴史と日伯関係史に残る年となりました。2014 FIFA ワールドカップは史上最大級の成功を収め、ブラジルは2億の人口と世界第7位の経済力を有する躍動的で多様性に富む国として認知されました。私たちは社会的包摂と再生可能エネルギーで世界の模となり、活気ある民主主義と文化的・人種的に寛容な環境を備えています。これは私たちのルーツである先住民と欧州、アフリカ、日系人を含むアジアの人々の遺産です。

この200万人近い日系ブラジル人と約18万人の在日ブラジル人は、幅広いパートナーシップの最良の礎をなすと言っても過言ではありません。しかし両国民の課題は、この関係を発展途上国第2位の経済力をもつブラジルと、先進国第2位の経済力をもつ日本の潜在力にふさわしい新次元へ高めることです。この精神に基づき、去る8月の安倍晋三総理大臣のブラジリア公式訪問に際し、両国政府は二国間関係を戦略的グローバル・パートナーシップへと高めることを決めました。

ブラジルと日本は重要なグローバル・アクターであり、より平和的で公正、持続可能な世界の構築にコミットしています。だからこそ、インドとドイツと共に G4 を設立し、国連安保理改革に取り組んでいます。この4カ国は、安保理の正当性と効力は、常任理事国と非常任理事国の拡大にかかっていると信じています。先般の国連総会開会式でルセーフ大統領が強調したように、これは喫緊の問題であり、旧弊な代表性の低い仕組みでは今世紀のいっそう複雑化する課題に対応できません。

ルセーフ大統領と安倍首相は、ブラジリアでの会見の 共同声明のとおり、軍縮、不拡散、国際安全、人権、気 候変動、持続可能な開発、世界の貧困撲滅を含む一連の 地球規模課題における対話と協力を強化し改善すること で合意しました。望ましい未来を建設するために、リ オ+20会議の成果に基づき、両国は野心的で首尾一貫し た開発アジェンダの策定に向けて共同で取り組むべきで す。G20の設立メンバーとして、両国は現下の経済情勢 の改善に大いに貢献できます。サンパウロで開催された 経済セミナーで安倍総理がポルトガル語で述べた表現を 用いれば、両国は可能な限り、発展と啓発、主導力を目



駐日ブラジル大使 アンドレ・ コヘーア・ド・ ラーゴ

指して一緒に(juntos)働くべきです。

安倍総理の訪問の翌月、第17回日伯経済合同委員会 および開発商工省 (MDIC)・経済産業省 (METI) の第8回合同委員会に参加するため両国の当局者と企業家が東京に集まりました。会合は極めて有益で、両国の官民がそれぞれの国の課題に適したより今日的な視点の枠組みで、伯日戦略的グローバル・パートナーシップに基づき貿易・投資・テクノロジーの流れをより拡大・改善する取り組みを示しました。インフラ基盤に対する優れた投資機会と、造船・医薬品医療機器産業でのパートナーシップ拡大の明るい展望が力説されました。

来たる 2015 年に、ブラジルと日本は外交関係樹立 120 周年を祝います。これを機に両国民をいっそう近づける様々なイベントが企画中です。駐日ブラジル大使館前に設けた臨時の「サッカー 2014 パビリオン」は成功を収めました。これは著名な日本人建築家・坂茂氏が設計し、大中小規模の多数の企業の協賛を得て建設され、8千人以上の方々にご来場頂きました。来年と再来年は、リオデジャネイロ・オリンピック・パラリンピック大会に向け、ブラジル式のもてなしのライフスタイル、陽気さと効率、近代性と創造性、開放性と柔軟性のユニークな組み合わせを皆様にご紹介します。私たちの価値観や文化の理解を促進することは、伯日戦略的グローバル・パートナーシップの今後 120 年の道筋をつける最良の方法の1つでしょう。今後とも、日本ブラジル中央協会と会員の皆様のご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

(ポルトガル語原文は当協会ホームページに掲載しています) 5

非日系へ裾野広がる日本研究 リオ連邦大学の国際学会

(協会常務理事、上智大学名誉教授)



リオデジャネイロ(以下リオ)の国際空港トム・ジョビ ンからほど近いリオ連邦大学で9月11日、12日の2日間、 日本語、日本文学、日本文化を専門とする大学教員、大学 院生を中心とする日本研究の国際学会が開催された。筆者 は、日本の文化外交を主題とするシンポジウムのパネリス トの一人として招かれたが、主催校によると参加者は全国 各地から208人、顔や氏名から想像する限りではあるが、 非日系のブラジル人が7~8割を占めている。日系を超え、 研究の裾野が大きく広がっていることを実感した。

学会の名称は、日本語・日本文学専門の大学教員の主導 で始まった経緯もあり、Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa & 長い。直訳すれば「日本の言語・文学・文化に関する大学 教員全国集会 | となろうか。1989年以来今回で23回を数え る。研究者の門戸を広げようと、2000年からはCongresso Internacional de Estudos Japoneses no Brasil (日本研究ブ ラジル国際大会)の名称を冠し、今大会はその第10回で、 最近は両者を束ねる組織として「ブラジル日本研究協会」 (Associação Brasileira de Estudos Japoneses、アレシャン ドレ・ウエハラ会長)が設けられている。大会の総合テー マは「日本研究―その近代性と現代性」であった。

● 密度の濃いプログラム

2日間とはいえプログラムは実に盛り沢山だった。研究 発表のセッションが17(文化6、言語4、文学、教育各3、 翻訳1)、発表者は総数で73人に上る。講演は、日本から の招聘者による「(日本) 文学における近代性・現代性の 諸問題」「日本の文化政策・文化外交」の2本、シンポジ ウムは筆者参加の1本に加え、「国際的多文化的社会にお ける日本言語と文化」の計2本、さらに言語・教育や日本 文化のほか、日本社会の文化人類学的考察や日本のナショ ナリズム研究を題材としたミニ・レクチャーが計4本行わ れた。併せて日本映画の上映、ポスター・セッションも実 施された。

日本語の専門コースをもつブラジルの大学は、サンパウ ロ大学、アマゾナス連邦大学、リオ連邦大学など8校を数 え、このうちパラナ連邦大学は2009年に、アマゾナス連邦 大学では2011年にそれぞれ開設されている*。選択科目や 単位非付与の科目として日本語を教育している大学は、国 際交流基金が把握しているだけで20校に上る。ちなみに日 本でポルトガル語の専門コースを有する大学は数え方にも よるが5校程度であるから、ブラジルの数は決して少くな い。中等教育(高校)レベルで日本語科目を開設する学校 や、移住社会(コロニア)をベースとした私立の日本語学 校があることを考えると、日本語教育のすそ野は一般に想 定されているよりもずっと広いと言ってよい。

大会プログラムから筆者が発表者の所属大学をピック アップすると、少なくとも18校を数えた。北はマナウス やフォルタレーザ、南はリオグランデドスルやクリチバか ら参加し、ブラジリアから来た院生グループは、およそ 1200 キロのバス旅行で、修学旅行的な乗りであった。「150 人程度と踏んでいたらから200人を超える参加者は驚き」 と、開催校であるリオ連邦大学のソニア・ロンギ・ニノミ ヤ教授は嬉しさを隠しきれなかった。

シンポジウムで報告されたサンパウロ大学准教授のレイ コ・マツバラ・モラレス先生の調査によると、同大学で の日本語学習者に占める非日系ブラジル人の比率が、2000 年代後半以降増え、学部1年生の場合で他学部から受講 する学生も含めると非日系は73% (2013年における「日 本語 I 」の受講者比率) に上っている。「マンガ、アニメ、 インターネットが動機となっている学生が少なくないが、 訪日経験者や伝統文化に関心をもつ層も多い」という。『ブ ラジル特報 | 前号で紹介されたブラジル政府の科学振興事 業「シエンシア・セン・フロンテイラス」(国境なき科学) との関連で、日本語習得に関心をもつ理工系の学生も出て 来ている。

「とにかく好きになってもらうこと、面白いと思っても らうことが大切」とマツバラ先生は強調され、伝統的な教 授法に捕らわれずに、ポップカルチャーをも材料にし得る 日本語教育の革新が必要だと指摘されたのが印象的だっ た。これを受けブラジリア連邦大学で教鞭をとる日本出身 の向井裕樹准教授は、「地域・民族・社会階層・家族構成 などを念頭におきインタラクティブな形で授業を進めてい る」と述べるなど、日本語・日本研究の地平線を拡げよう

との熱意が会場の随所で強く感じられた。

ブラジルは、戦前・戦後を通じ多数の日本移民を受け入 れた歴史があるため、日本側には、移住者の子孫に対する 日本語教育、すなわち「継承日本語」を重視してきたとこ ろがある。しかし、今学会に参加して、日本語教育はもと より日本文化・日本研究の振興のあり方として、ブラジル 社会全体を念頭においたものに早急に切り替えていく必要 があると感じた。そうして得られた知見は、ブラジル社会 が多様な文化を吸収し融合(フュージョン)させてきた歴 史があるだけに、わが国の文化外交のあり方にも示唆を与 えるものとなろう。こうした点を考えると、惜しむべくは、 経済や政治など現代日本に関する社会科学的な発表が少な かったことである。

◆◆ 次回はリオ五輪の 2016 年、 アマゾナス連邦大学で開催

「中国語に決して負けていませんよ」との声も先生方と の懇談で聞かれた。中国がブラジルーの貿易相手国になっ たこともあり、同国への関心が高まるブラジルだが、こと 大学における外国語教育においては、日本語は中国語に負 けていないというのである。それには、中国語の語学コー ス開設の支援の見返り として、同国の文化広 報・言語教育の窓口で ある孔子学院が運営自 主権を得ようとする態



度が、大学側の警戒感を生んでいる事情も働いているよう だ。こうした違いは、大会の合間に覗いた書店でも感じら れたことである。原語(日本語)から直訳された枕草子や 夏目漱石の作品が出版され、企業経営といった分野でも日 本関連の書籍はあっても、中国関連の出版物はまだ少ない。

大会最後の総会で、次回は、リオ五輪(オリンピック・ パラリンピック)が予定される2年後の2016年で、アマ ゾナス連邦大学が主催校に決まった。同大学の本拠がある マナウスは、地域振興のため保税加工区が設置され、家 雷、オートバイをはじめとして多数の日本企業が進出して いる。それこそアマゾンの中央部まで日本語・日本研究を 浸透させる絶好の機会である。資金面で国際交流基金など が長年支援を続けてきてはいるが、ビジネスを進めるうえ でも不可欠な信頼関係構築のため、マナウスに進出してい る日本企業の応援が欲しいとの思いを抱きながら、すでに 真夏の太陽がのぞく大会会場を後にした。



最近のブラジル政治経済事情(外務省中南米局提供情報並びに現地メディア報道他より)

統一選挙に関して

10月5日に実施された統一選挙は、州議会議員、州知事、 下院議員(全員)、上院議員(3分の1改選)、大統領を選出す るもので、電子投票のおかげで即日開票、翌日には結果確定 している。

1. 大統領(有効票の得票率)

ルセーフ大統領 (PT 労働者党) 41.59% ネーヴェス候 補 (PSDB 社会民主党) 33.55%

シルヴァ候補 (PSB 社会党) 21.32% その他合計 3.55% と過半数を獲得した候補がいなかったため、上位2者の間 で決選投票となった。日程は、10月11日から24日まで 政見放送、26日決選投票となる。地域的には北部・東北部 の 15 州で優勢だった与党ルセーフ候補に対し、南東部 9 州 で優勢だった野党ネーヴェス候補が挑戦する形となるが、決 選投票のカギを握るのは、故カンポス候補の代替として登場 し、一時期40%前後の支持率を得ていたシルヴァ候補の得 票分の行方だ。その彼女が、条件付きながらネーヴェス候補 支持を表明したこともあり、決選投票は間違いなく大接戦と なる、と各紙が報道している。

2. 州知事

13州知事が選出(残りの州は26日に決選投票)された が、高得票率で話題となったのは、ペルナンブーコ州のカマ ラ氏(PSB 社会党 68.08%)、マラニャン州のジノ氏(PCdoB 共産党 63.52%)、ピアウイ州のディアス氏 (PT 労働者 党 63.08%)、サンパウロ州で再選されたアルキミン知事 (PSDB 社会民主党 57.31%) など。

3. 下院議員

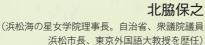
与党 PT(労働者党) は 70 議席、PMDB(民主運動党) は 66 議席、野党 PSDB(社会民主党) は 54 議席という結果に なったが、PTは18議席も減らし、PSDBは10議席増。 とはいえ連立与党合計では304議席で過半数を占めており、 一方ネーヴェス陣営は128人となっている。大統領決選投 票の結果次第では、与党連合も野党連合も"組み替え"が起 こることは必至、と各紙が報じている。

4. 日系下院議員

サンパウロ州から、ケイコ・オオタ (PSB 社会党、再選)、 ワルテル・イイホシ (PSD 民主社会党)、パラナ州から、ヒ デカズ・タカヤマ (PSC キリスト教社会党)、ルイス・ニシ モリ (PR 共和党、再選)、の計 4 名が当選した。

多文化共生と日系ブラジル人

-浜松市長の経験から





ブラジル移民 100 周年を祝った 2008 年当時日本在住 ブラジル人は 30 万人を超え、定住化の傾向も強まって、 日本社会における在住ブラジル人の存在は年々大きく なるように見えていた。しかし、その年秋のリーマン・ ショックで状況は激変し、多くのブラジル人が職を失っ て帰国を余儀なくされた。その後東日本大震災や福島原 発事故の影響もあり、現在の在住ブラジル人は 20 万人 を割るまでに減少している。

本稿では、私が市長を努めた浜松市におけるブラジル人の歩みと受入れ社会の対応を述べる。そして、日系人の受入れの事例を通して、労働力を目的とした功利的・限定的な外国人の受入れは構想どおりにはならないこと、また、どのような条件を付した受入れでもそれは結局「人(ヒト)」の受入れに帰結するものであることを述べたい。

1990年からリーマン・ショックまで

浜松市は、近代以来製造業の町として発展してきており、ホンダ、ヤマハ、スズキなどの世界的な企業を生み出してきた。現在の主力産業は自動車産業で、1990年の改正入管法の施行以来自動車関連産業の工場で働く労働者として日系ブラジル人が急増した。

私が市長に就任した1999年当時、約58万人の市人口のうち、外国人登録者数は約1万7千人、そのうちブラジル人は約1万人に上っていた。浜松市は80年代までは特に外国人の多い町ではなかったが、改正入管法施行から10年経ったその時点では市民にとって外国人は見なれた存在になっていた。彼らの多くは派遣労働者として自動車関連の工場で働いており、大企業の下請けの中小企業の経営者にとっては、厳しいコストカットの要求に応えて経営を維持していくために、彼らの存在は不可欠のものとなっていた。

その一方、ブラジル人たちをめぐっては、子どもの不 就学や医療費の不払い、ゴミだしルールや駐車ルールを 守らない、夜遅くまで騒ぐ、などといった生活上のトラ ブルなど、様々な問題が深刻化していた。市民の間には、 外国人が固まっていると不安に感じるという声があった ことも事実である。また、市内の宝石店でブラジル人の 女性に対する入店拒否事件があり、その女性が起こした 損害賠償請求裁判が原告勝訴となったのもちょうどその ころだった。

浜松市では、外国人の急増に対応して、外国語情報の 提供、窓口への通訳配置、外国人相談や子どもの日本語 指導などに取り組んでいたが、それらは決して十分とい えなかった。私は、外国人が多く住む浜松市にとって、 外国人と日本人の間に同じ市民としての良好な関係を築 くことは市政の最優先課題の一つであると位置づけ、同 様の問題を抱える地方自治体の連携組織である「外国人 集住都市会議」の創設、浜松市外国人市民会議の設置、 バイリンガルによる子どもの学習支援教室、就学支援員 配置、市立高校へのインターナショナルクラスの設置な どの新しい施策に積極的に取り組んだ。こうした取組み は、「多文化共生」と呼ばれるようになり、外国人が急 増した多くの地域に広がっていった。

リーマン・ショック以後

浜松市においては、2008年の秋まではブラジル人等 外国人市民は毎年着実に増え続けた。定住化も進展し、 ブラジル人の中にはローンを組んで一戸建ての住宅を購 入する人たちも出てきた。そのような中でブラジル、日 本両国で祝われた「日本からのブラジル移民 100 周年」 は明るい気分に満ちたものだった。

しかし、そのような気分はリーマン・ショックによって吹き飛んでしまった。リーマン・ショックがもたらし

た事態は、一言でいえば、日系ブラジル人の来日から雇用、住宅まで生活のすべてを包み込んでいた、派遣事業者を中心としたシステムが崩壊し、日系ブラジル人たちが直接日本社会と向き合って生きざるを得なくなったということである。

リーマン・ショック以後、浜松市においても、従来の 事業に加えて新たな事業が始まった。それは、ハローワークと連携したワンストップ相談、市営住宅の提供、厚生 労働省と連携した求職中の外国人対象の短期集中日本語 教室、文部科学省と連携した不就学の子ども等のための 学習支援教室、市の臨時職員としての採用、外国人市民 の学習支援と日本人市民・外国人市民の交流等を目的と する外国人学習支援センターの設置などであった。

このような取組みにもかかわらず、浜松で生活を維持する見込みの立たないブラジル人は次々に帰国し、あるいは北関東や愛知県など仕事のあるところ移動した。浜松には事業の基盤を築けた人や短期の仕事をつないで何とか生活を維持できる人が残る結果になり、ブラジル人人口は半分に減った。しかし、一旦入国した人々の一部は必ず定着するものであり、浜松にはブラジル・コミュニティが根付いている。ブラジル独立記念日には市内ブラジルレストランで祝賀会が行われ、市内の公園ではエスニック・ビジネス関係者やブラジル人が集まる「ブラジルデイ・イン・ハママツ」が開催される。また、今回のワールドカップを機に日伯の児童が交流するフットサル大会が開催されるなど、ブラジル人の存在は浜松市に多様性をもたらすものとなっている。

次に、これまで浜松市をはじめとする地方自治体が推進してきた外国人受入れ政策(「多文化共生」)について、その結果と課題について述べたい。

外国人受入れ政策(多文化共生)の評価

まず、認めるべき主な点としては、リーマン・ショック 以後減ったとはいえ、なお 2013 年末で 18 万 1 千人のブ ラジル人が日本に住んでいる。いろいろな問題はあるけ れども、日本社会のブラジル人受入れはこれだけ進んだ と見ることができる。第 2 に、派遣業者による間接雇用 の枠組みから出て、エスニック・ビジネスや農業、介護そ の他の産業に従事する人も出てきている。第 3 に、第 2 世代の間では、まだまだ高校進学率は日本人に比べて低 いものの、大学に進学する人も出てきていることである。



ブラジル独立記念日式典(2013年9月7日、浜松市内のブラジルレストラン「セルヴィツー」にて)

次に、取組むべき主な課題だが、まず第1に、不況により失業したブラジル人が日本語能力や職業技術の不足のために再雇用されなかったことは、日本語教育、職業訓練などの社会統合政策が不十分だったことを物語っている。第2に、子どもたちの教育については、不就学や日本語も母語も十分に身についていないダブルリミテッドの子どもの問題などがある。第3に、受入れ社会の側には、外国人に対する無関心や差別的、排他的な意識が根強くあり、学校でのいじめや就職・雇用の差別となって現れている。

多文化共生の今後の展望

以上のように、「多文化共生」には様々な課題があるが、地方自治体および市民団体が社会の多文化化の最前線で苦労しながら、「多文化共生」の標語の下に外国人住民に関わる取組みを実施してきた、その蓄積は貴重なものである。今後は、「多文化共生」の中身を、社会統合政策や人権擁護の見地からより良いものにしていくことが、ブラジル人をはじめとする外国人住民および受入れ社会の双方にとって重要だと考える。

今後の日本における日系ブラジル人社会は、どのように展望されるだろうか。日本社会には、ピーク時に比べれば減ったとはいえ、現在でも20万人近いブラジル人が在住している。その中には、教育や就業機会に恵まれず、ほとんどブラジル人コミュニティの中だけで生活している者も多いが、他方、大学に進学し、グローバルに活躍する能力を身につけた第2世代も生まれている。そうしたリーダー的人材の活躍に期待しつつ、受入れ社会として、教育や雇用を通じたブラジル人の社会参加を広げていけば、日系ブラジル人社会は日本社会の重要な構成要素として定着していくのではないだろうか。

9

8

ブラジル市場新規参入の

留意点

00

0

0

0

0

0

-0

0

0

-0

0

0

0

0

0

0

0

0

0

0 0

2

10

0

0



渡邉泰秀 (弁護士。長島 大野·常松法律事



笠原康弘 (弁護士。 同NYオ フィスを経て、現 在サンパウロ駐在)

ブラジルは2億人超の人口を抱え、近年のミドルク ラスの拡大に伴い、多くの外国企業にとって魅力的な 投資先となっている一方、ブラジル特有の問題点も存 在する。ブラジルで新規に事業を始めるためには、ブ ラジルに新会社を設立するか、又は既存の会社を買収 するという方法が一般的であるところ、本稿ではそれ ぞれについての留意点を取り上げる。

新会社設立に当たって

ブラジルに新会社を設立する場合、日本の株式会社 に相当する Sociedade Anônima (S/A) と日本の合 同会社に相当する Sociedade Limitada (Limitada) の二つの選択肢があるが、ブラジルにおいて上場する ことを意図していない場合には、より柔軟な機関設計 が可能で、財務情報の開示も義務付けられていない Limitada を選択することが多い。新会社設立のための 書類の作成自体は、法律事務所などの専門家に依頼す れば簡単に作成可能だが、連邦、州及び市町村その他 の当局への各種の届出やライセンスの取得が必要であ り、その手続には少なくとも90日程度の期間を要し、 また、開始する事業の内容によっては、特別の許認可 が必要になるため(残念ながらブラジルでは特別の許 認可が必要な事業が少なくない)、さらに期間がかかる 可能性がある。そのため、新会社設立のためには、専 門家と相談の上、相当期間事前に準備を進める必要が ある。

ブラジルにおける M&A

上記のとおり、ブラジルにおける新会社の設立には 諸手続により時間がかかってしまい、迅速にブラジル で事業を開始できない可能性があることから、事業を 行うために必要な登録・許認可を既に有している既存 の会社を買収する方が簡便な場合も多い。ブラジルの 会社を買収する手法は、日本の会社を買収する方法と 類似する点も多いが、ブラジル法の観点から、買収に 際して事前に留意すべき事項がいくつかある。

一つ目は労務問題である。ブラジル法上、従業員を

いつでも解雇することは認められているものの、実際 には労働訴訟が多発しておりブラジルコストの一つと されている(典型的な訴えは時間外賃金の支払いを求 める請求)。ブラジルでは、労働訴訟は通常の民事裁判 所ではなく、労働裁判所において審理されるが、労働 裁判所は、労働者に有利な判断をしがちであり、弁護 土費用など訴訟に関連する費用を含め、会社にとって 大きなコストとなる。買収の対象会社を事前にデュー・ デリジェンスすることにより、現存する労働紛争は確 認可能であるが、買収をきっかけに新たな労働紛争が 生じる可能性がある。

二つ目は税務紛争で、これもブラジルコストの一つ とされている。ブラジルでは、連邦、州及び市町村の それぞれの単位で極めて複雑な税制がとられており、 その税制を正確に理解し、遵守するだけでも容易では ない。それに加えて、ブラジルの税務当局は、アグレッ シブな姿勢で知られており、ある程度の規模の会社は、 多かれ少なかれ税務当局との税務紛争を抱えているこ とが一般的である。このため、買収前に税務の専門家 による税務デュー・デリジェンスを行うことが不可欠 である。

三つ目は有限責任制度による保護が完全ではない点 である。S/A であっても Limitada であっても、会社 の株主や持分権者は原則として有限責任しか負わない (出資した額以上の責任は負わない) が、税務や労働債 務に関しては、会社に十分な弁済資力がない場合、例 外的に会社を支配している株主・持分権者(特殊なケー スでは経営陣) に対する請求が認められる場合がある ため、ブラジルの会社を買収しようとする場合には、 その潜在債務が買収者自身に及ぶ可能性がある点にも 留意しなければならない。なお、これは株式取得によ り潜在債務が存在する会社を買収する場合のみならず、 債務を切り離して資産のみの譲渡を受ける資産の取得 者に対しても税務や労働債務の請求が認められること があるので、買収戦略を法務や税務の専門家に相談す ることが重要になる。

ホリバ・ブラジル社

◆会社概要

私たち HORIBA グループは、世界 27 カ国 38 社でグロー バルに分析・計測システムに関する製品とサービスを提供 するリーディング・カンパニーです。市場は多岐に渡り、 自動車計測、科学計測、環境・プロセス計測、医用計測、 半導体計測に展開しています。

堀場製作所は1953年に京都で創立し、2013年に創立 60 周年記念を迎えることができました。社是は「おもしろ おかしく」。京都の文化をベースにして常に先端技術を開拓 し、グローバルにビジネスを展開しています。

◆ブラジル進出

ブラジル支社の創立は 1997 年にさかのぼり、グループ 会社であるフランスの医療用血液検査装置メーカーABX 社 (現ホリバ ABX 社)の試薬工場を基盤として誕生しました。 今年4月で17周年を迎え、赤血球や白血球などの計測装 置である血球計数装置分野で南米のトップメーカーに成長 しました。営業およびサービスの拠点でもあり、血球計数 装置の修理・整備・中古販売ビジネスも拡大しています。

2011年には社名を [HORIBA Instruments Brasil. Ltda.」へ変更。環境・プロセス分野の製品である煙道排 ガス分析装置や水質分析装置等と、科学分野の製品である pH メーターや蛍光分光分析装置等も南米に拡販するなど、 HORIBA グループの南米を統括する拠点に成長しました。

2014年には、血球計数装置用試薬の増産に対応するた め、サンパウロ市からサンパウロ 州郊外のジュンジアイ市 へ移転・拡張し、試薬の年間生産能力を4倍に拡大しました。 新拠点のオープニングセレモニーは、日本人移民の日であ る6月18日に開催しました。

ブラジル支社の創立から事業拡大を続けられた一方で、 ブラジルの大きな為替変動による苦い経験もあります。 2000年ごろにはロシア通貨危機やアルゼンチンの債務不 履行等の影響により、財務は厳しい状況が続きました。そ のような中でも、堅調なブラジル経済を背景とした医用分 野の成長とともに、回収条件の改善やブラジル - フランス 間の取引条件の見直し等、種々の合理化策を推進し、危機 を乗り越えてきました。

現在、従業員数は128名(2014年6月現在)。その 内、日本からの駐在員は中堅2人のみと、現地従業員主導 で運営しています。この経営方針はブラジルだけでなく、

HORIBA グループ全体を見ても同様です。全従業員の6割 は日本人以外であり、単に安価な労働力を海外に求めるの ではなく、各国の文化に根ざした様々な「人財」(HORIBA グループでは、社員は財産という思いを込めて"人材"で はなく"人財"と表現しています)を大切にしています。ジュ ンジアイ市の新拠点の立ち上げも現地人財が活躍し、ブラ ジル国家衛生監視庁 (ANVISA) から、医用製品の生産承 認を早期に取得することができました。

もう一つのブラジルの拠点であり自動車計測分野を担 う 「TCA HORIBA Sistemas de Testes Automotivos Ltda. | は、2005年に設立しました。自動車メーカーなど を販売ターゲットとした巨大なエンジン試験コンテナの生 産・販売が事業の中心であり、南米でのシェアは100%(自 社調べ)を誇ります。売上高の3割は南米以外で、アメリ カやインド等、グローバルに展開しています。また、自動 車計測分野の製品であるエンジン排ガス測定装置やエンジ ン性能試験システム等の販売・サービスにおける南米拠点 としても事業拡大を進めています。従業員数は58名(2014 年6月現在)。

HORIBA グループで は「HORIBA Group is One Company」を テーマに掲げ、 南米においても ブラジル2社の 協力体制を強化



し、効率化と一体化による相乗効果を高め、企業価値向上 をめざしています。

創業者 堀場雅夫の思いのこもった社是「おもしろおかし く」は、「人生のもっとも活動的な時期を費やす仕事にプラ イドとチャレンジマインドを持ち、エキサイティングに取 り組むことによって人生の満足度を高め、よりおもしろお かしく過ごせる」という思いがこめられています。海外グ ループ会社へも「Joy and Fun」と訳して浸透しています。 ブラジルの人財もこの社是を胸に、新拠点を活用して当社 のオリジナリティをさらに磨くことで活躍の場を広げ、ブ ラジルの発展に貢献します。

ノルデスチ文化再興運動を主導した 劇作家スアスーナの死

岸和田仁(『ブラジル特報』編集人)

ブラジル文学界の殿堂「ブラジル文学アカデミー」会員であり、ノルデスチ大衆文化復興運動をリードした劇作家アリアーノ・スアスーナ(1927-2014)が7月23日、レシーフェで亡くなった。享年87歳。ローカル文化に徹底的に固執した文人であったが、コロンビアの小村におけるローカルな物語を通じてインターナショナルな文学世界を構築したガルシア・マルケスのノルデスチ版といえるような、大きな存在であった。だからこそ、地元レシーフェの新聞メディアが、スアスーナ特集別刷を組んだのは当然だが、サンパウロやリオの主要メディアも大きなスペースを費やして追悼記事を掲載し、テレビでは彼のドラマ作品が再放送されたのである。

パライーバ州知事(当時は州統領)ジョアン・スアスーナの8番目の子として、1927年、州都ジョアン・ペッソアで生まれたアリアーノは、1930年革命の混乱の中、父親が暗殺されてしまう。少年時代レシーフェへ移り、名門法科大学を卒業するが、学生時代から演劇活動に熱中し、1947年、まだ二十歳の時、最初の戯曲を発表している。二足どころか三足ないし四足の草鞋を履く人生を歩み、弁護士業や大学教師業あるいは州政府高官(ペルナンブーコ州文化局長など)と並行して、劇作家や小説家としても活躍するが、代表作といえるのが、『オ・アウト・ダ・コンパレシーダ(聖母のお裁き)』(1955年)だ。

コルデル文学(ヨーロッパ中世からの口承文学を継承する大衆小冊子文学)に描かれるノルデスチ内陸部における人間ドラマを戯曲化したものだが、これまで三回も映画化され、1999年にはグローボのTVドラマとなって大いに話題となった。2000年の映画化では、人気俳優セルトン・メロが主演したことで、興行的にも成功したが、ロケ地となったパライーバ内陸のカバセイラスは立て続けに他の映画でも舞台となったことから、「ノルデスチのハリウッド」

と呼ばれる有 名地になった ほどだ。また、 19世紀半ば、 ペルナン コ州内陸部の

サンジョゼ・ド・ベルモンチで起きたメシア主義運動は、バイーアのカヌードス戦争の小型版ともいえるが、この事件を小説化した『ペドラ・ド・ヘイノ(王国の石)』(1970年)も、セルバンテスの『ドンキホーテ』にも比される高い評価を受け、何度も劇化されたばかりでなく、2007年にはTVドラマ化(グローボ)されている。アリアーノが作品を通じて描いたものは、千年王国運動ないしメシア主義運動と呼ばれることになるノルデスチの神秘的世界であり、庶民的精神世界であったが、1990年、ブラジル文学アカデミー会員に選出されたことで、"全国認知"されることになった。

彼が1970年立ち上げた "Movimento Armorial(名誉 回復運動)" は、ノルデスチの大衆文化再評価運動であり、文学ばかりか舞踊、音楽、演劇、絵画、彫刻、映画などあらゆる芸術文化活動を活性化しようと目論んだもので、作家ハイムンド・カヘロ、陶芸家フランシスコ・ブレナンといった大物文化人たちも巻き込んでいく。

音楽関係で、アリアーノの影響を最も受けたのが、マンゲ・ビートを創始したシコ・サイエンス&ナサゥン・ズンビであった。文化ナショナリストとしてアリアーノはシコに対して、「あなたの音楽は素晴らしいが、サイエンスという英語名は変えるべし」と訴えた、というエピソードは広く知られている。

彼の作品は、英語、フランス語、スペイン語、ポーランド語、ドイツ語などに翻訳されているので、欧米でも文芸&演劇関係者には知られているが、残念ながら、日本語の翻訳はまだない。

ブラジルサッカー 再建なるか



武智幸徳 (日本経済新聞社運動部編集 委員。ほぼ一貫してサッカー 担当、『サッカー依存症』な

過ぎし夏、優勝を期待されたサッカーのワールドカップ(W杯)で開催国ブラジルが4位に終わったことはまだ記憶に新しい。あまりにも不甲斐ない負け様にブラジルサッカーの衰退がこれから始まるという見方まで広まったが、果たしてそうだろうか。

ブラジルでW杯が開かれたのは64年ぶりのことだった。前回の1950年大会は悠々と最終戦に勝ち進み、ウルグアイに引き分けても優勝というところまで漕ぎ着けた。ところが、その隣国のライバルに1-2のよもやの逆転負けを喫し、優勝カップをさらわれた。そのショックはあまりにも大きく、舞台となったスタジアムの名前から「マラカナンの悲劇」と呼ばれ、今日まで語り継がれている。

雪辱を期した今大会はさらに悲惨な結果が待っていた。特に「ベロオリゾンテの惨劇」と形容されることになった準決勝のドイツ戦は1-7という屈辱的大敗。ブラジルがW杯で敗れる時は「内容で上回りながら勝負に負けた」ということが多いのだが、この試合では心技体、すべての面でドイツに圧倒された。そういう意味では64年前の「悲劇」以上の衝撃をブラジルに、いや、世界中のサッカーファンにもたらすことになった。

もっとも、私自身はこれでブラジルが「サッカー王国」の座からただちに転落するとはまったく思っていない。 W杯はたった7試合でチャンピオンを決める、かなり特殊なトーナメントである。明白な誤審や微妙なジャッジに泣かされることもしばしば起きる。敗北は敗北として厳粛に受け止めなければならないが、4年に一度のW杯の結果を元にすべてを判断するのは早計だろう。それは大学入試で志望校に落ちた一事をもって、その受験生の努力や人格まで全否定するのと同じことではなかろうか。

W杯の後、闘将ドゥンガを新監督に迎えたブラジルはコロンビア、エクアドル、アルゼンチン、日本を相手に4連勝を飾っている。ブラジルW杯に出場したネイマール、オスカル、新鋭コウチーニョからベテランのカカ、ロビーニョまでバランス良くメンバーを選び、順調に滑

り出した。要するに今でも普通に強いのである。

問題点はある。卓越したストライカー、ブラジルでいうところの「9番」がいないことだ。ブラジルが圧倒的な技術力で他を圧倒できたのはジーコやソクラテス、ジュニオールといったクラッキ(名手)を揃えた82年、86年のW杯までで、それ以降は堅い守備とFWの決定力で栄冠をもぎ取ってきた。優勝した94年W杯はロマーリオ、2002年W杯はロナウドという傑出したストライカーが最前線にいた。そんなFWが再び降臨すれば、事態は一気に好転するはずである。

ブラジルのW杯を制したドイツはサッカー協会が主導して選手育成の方針を末端のクラブまで行き渡らせることができる。そういう整然とした、号令一下のドイツ式育成などブラジルは逆立ちしてもできない。真似をする気もないかもしれない。百家争鳴というか、いろいろなクラブがそれぞれの思惑、信ずるところに従って、良くも悪くもてんでばらばらに選手を育てるのがブラジル流なのである。

かつてはそうした混沌の中からブラジルしか生み出せない異能のアタッカーが次々に現れた。ところが、都市化や遊びの多様化が進んだことで、偉才の孵化器だったストリートサッカーに興じる子供が少なくなり、今では常識の範囲内に収まる選手しか出てこなくなったとされる。それが事実なら、ブラジル再建の唯一の方法は、自信を無くして欧州流の育成方式を採り入れることではなく、路上のサッカーにあった、遊びやひらめきや道化の精神をサッカーに、特に育成の現場に取り戻すことではないだろうか。

腐ってもブラジルはブラジルである。育成方法やコーチの力量に問題はあっても、激烈な競争社会が原石を珠に磨く力はまだまだある。天才もまた忘れた頃にやって来るものだ。養殖のような効率も生産性もないが、天然ものの価値を認めて、天才の一本釣りができる日を気長に待つ。ブラジルはそれでいいのではないだろうか。



ウーマン・アイ

ブラジルの 「ババさん」

秋山祐子(不動産鑑定士、サンパウロ大学不動産研究所 =NRE-POLI/USP 研究員)

ブラジルでは、白いシャツに白いズボン、白いスニーカーの女性が乳幼児といるのをよく見かける。彼女たちはポルトガル語でババ(Babá)と呼ばれる「子守」であり、日本人駐在員は、「ババさん」と呼んでいる。ババさんとは、今どきの日本語で言うならば、ベビーシッター、キッズシッター、ナニーである。

駐在員家庭では、一時的なババさん利用が多い様だが、ブラジルの一定の階層では、赤ちゃんが生まれると専任のババを雇う。日常の衣食住の世話から、幼稚園への送迎、習い事の付添等をしてもらう。母親が仕事等で外出中の場合に限らない。母親が在宅していても、専業主婦であっても、ババがいる。

赤ちゃんを定期健診に連れて行くときも、母親はお医者 さんと話し、ババが注射で泣いている赤ちゃんをあやして、 着替えさせる。また、ブラジルでは子供の誕生日パーティ に親も招待される。1~2歳児など、目が離せない子供の 面倒を見るのはこのババ達であり、親たちは親同志の交流 を深める。夫妻で夕食に招かれることも多い。ブラジルで 社会生活を維持するために、ババは必要なのである。

といっても、ババに子育てをまかせるのではない。「子供の躾、教育をどういう方針で行うか」を決定するのは親であるし、そのためにババの教育をするのはもっぱら母親の役目である。これが結構大変だ。自分で子供の面倒を見た方が確実だ、と思うことがしばしば。子供の成長段階にあわせて、ババが成長してくれないので、ババの解雇、新規採用を余儀なくされることもある。

住み込みの場合が多いため、ババ探しは公募を避け、知り合いの家のメイドさんの田舎の親戚等のつてを頼ることが多い。子供が成長してくると、大学で教育学を学んでいる夜学の学生さんに来てもらうこともある。

母親業には、ババ探し、ババの教育、ババのマネージメントが必要なのだ。

イベント 新刊書紹介 協会からのお知らせ

◆◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 **◆◆◆◆◆◆**

『イッペーの花』(紺谷充彦著)

小説・ブラジル日本移民の「勝ち組」事件、というサブタイトルが付されている如く、終戦直後の在ブラジル日系社会におけるカチマケ抗争の奇形的副産物といえる"二セ宮様事件"(「朝香宮」を名乗る加藤某が戦勝を信ずる多くの移民一世の財産を騙し取り瀟洒な生活を楽しんだが、1954年1月警察に逮捕された)を伏流としたノベル。著者は元サンパウロ新聞記者。日系社会史を知るための読み物として多くの人に薦めたい。

(無明舎出版 2014年7月 230頁 1700円+税)

「なぜ今、移民問題か」(別冊 環20) 硬派の総合雑誌『環』別冊が、移民問題と いうポレミックなテーマを総力特集した。移 民政策と日本の未来像、労働政策と移民、多文化共生、歴史の中の移民、といった章ごとに労働、教育、法・権利、レイシズムなどを論じている。ブラジル関連では、三論文が収録されており、なかでも二宮正人教授の「日系ブラジル移民の歴史と現在」は、ブラジル移民問題の多面性を実にわかりやすく整理・叙述している好論文である。

(藤原書店 2014年7月 376頁 3300円+税)

◆◆◆◆◆ イベント◆◆◆◆◆

年末忘年フェスタ

日時:2014年12月11日(木)18:30より

司会: 榎戸キャスター

場所:パークサイド・タブレス 住所:千代田区紀尾井町 3-1-2

紀尾井町ビル 2 F

http://tables.jp.net/parksidetables/

参加費:追って連絡



ジャーナリストの旅路

タンクレード・ネベスの思い出

明石和康

(時事通信解説委員。元サンパウロ特派員 パリ、ワシントンも駐在)

10月5日に行われたブラジル大統領選挙の第一回投票では、ルセフ大統領に次いで社会民主党党首のアエシオ・ネベス氏が2位に入り、26日の決選投票に駒を進めた。ミナスジェライス州知事経験者と聞いて、もしやと思った。調べてみると、私の知っているあのタンクレード・ネベス氏が母方の祖父だった。

国民からタンクレードと呼ばれ、親しまれた祖父のネベス氏は1985年1月、議会で行われた軍政下の間接選挙で野党候補として勝利を収め、21年ぶりの文民大統領に選ばれた人である。軍政のルールに則った間接選挙で野党候補が勝ち、民政移管が実現するなどその1年前には誰も予想できなかった。

しかし、南米では民主化機運が盛り上がっていた。82 年のフォークランド諸島をめぐる英国とアルゼンチンの 戦争でアルゼンチン軍政は完敗。翌年、民政に復帰した。 これに刺激されたブラジルでは、「ジレタス・ジャー」(「今すぐ直接選挙を」)と要求するデモが起き、サンパウロやリオでは100万人規模の大集会に膨れ上がった。そのうねりの中で登場したのがタンクレードだった。

私はミナスジェライス州知事だった彼にインタビューするため、州都ベロオリゾンチに飛んだ。外国人記者との会見に応じた彼は、落ち着いて質問に答えた。軍政打倒の意欲に燃えていた。「この人は選挙に勝つ」と感じたのを覚えている。

しかし、タンクレードは74歳と高齢だったためか85年3月、就任式前夜に突然倒れる。腹部の病で大統領に就任できないまま、4月21日にサンパウロの病院で死去した。連日、病状を日本に送稿していた私は、祭日だったその日の夜、ラジオ片手に友人とレストランで食事をしていた。突然、報道官がラジオで「オ・プレジデンチ・ファレセウ」(大統領が亡くなった)と発表した。もう、食事どころではない。急いで支局に戻った一。

タンクレードが勝ち取った民政はブラジルに定着した。 孫の奮闘ぶりを、彼は草葉の陰から満足げに見守ってい たに違いない。



スペイン・中南米との架け橋として20年 スペイン語・ポルトガル語の イスパニカ

www.hispanica.org

ことばを学ぶ人にも、ビジネスマンにも、高品質で充実のサービスを提供いたします

語学スクール

初心者はもちろん、中・上級者向け

・オンライン ※ポルトガル語は通学のみ

コースも充実の溜池山王教室

www.hispanica-academia.org

通訳 翻訳

ビジネスから文芸まで経験豊富な プロがクオリティの高いサービスを 提供

取扱い言語: スペイン語・ポルトガル語 英語・フランス語・ドイツ語 イタリア語・ポーランド語

中南米の情報提供

スペイン通信社EFEの情報をもとに 中南米の最新ニュースを日本語で

·中南米経済速報(週刊) ·政治·治安情報 "CRONICA"

(月~金の毎日)

企業語学研修

•通学

通信添削

ニーズに合わせた効果的な研修

粒ぞろいの講師が、ビジネスを成功に 導く語学力習得をとことんサポート。実 践的なコミュニケーション力を最大限ひ きだすレッスンをアレンジします。

書籍の執筆・編集

赴任、出張にはこれ!

安心のカナ発音 英語付き。





ミニマム文法やミニ辞 典も掲載。 三修社刊

14

-バル人材の採用なら

日経HRは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け 転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。

日経HR独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経BP社のコンテンツをベースに就職活 動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのHR(Human Resources)情報 をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経BP社の各種専 門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と 意識する優良企業を結びつけます。



日経キャリアNET http://career.nikkei.co.ip

キャリアコンサルティング(人材紹介)

エグゼクティブ、金融、IT系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材 紹介事業を展開しています。日経キャリアNETや日経グループ各媒体との連動や アライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っています。



プロフェッショナル、エグゼクティブ のための転職支援サービス





日経アジアリクルーティングフォーラム

2013年8月に第1回フォーラムを開催。1885名の現地事前登録から、マレーシア、 インドネシア、タイ、フィリピン、中国、ベトナム、シンガポールのアジア7カ国の80 名のトップ学生を日本へ招待。内21名が本社採用となりました。今年も規模を拡 大して、8月に開催いたします。





日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体(雑誌・Web・メルマガ・フォーラム)を 活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。









仕事の先の幸せを創造する会社

